

展示のあれこれ ―博物館展示における挑戦と未来―

おおしま みつはる
大島 光春(学芸員)

博物館における展示

博物館の本質はそのコレクションにあると私は考えています。その意味では、博物館の心臓部は収蔵庫です。とはいえ、ほとんどの来館者にとって、その目的が展示見学にあることも確かです。私自身も他の博物館の展示を見に行くのは好きですし、仕事であっても楽しみです。

珍しいお宝を美しく陳列することが展示だった時代もありましたが、近年、特に自然史博物館では「メッセージを伝える」ことに重点が移っているように思われます。このような変化は、平成24(2012)年から学芸員課程に博物館展示論が加わったことから裏付けられます。たとえば『展示論』(日本展示学会編, 2010)では「展示とはある意図に基づき伝えたい事柄をわかりやすく提示することをいう。」とあります。

博物館の展示活動はとても幅広く、奥が深く、2ページで納めることはできませんので、総論は『展示論』に任せることにして、小論では筆者が学芸員として実践してきた中からいくつかを紹介いたします。

常設展示と企画展示

常設展示とは博物館にいつもある展示のことで、一度作ると長く展示されます。生命の星・地球博物館(以下、当館)の場合も30年間(おそらくこの先もしばらくは)変わりません。常設展を英語ではpermanent exhibitionといいます。当館においては自虐的に「永久」展示という訳を当てたくります。

企画展示は、特定の期間に、特定のテーマで行われる展示です。特別展という呼び方もあり、博物館によって特別企画展という呼び方もあります。当館では、有料の展示を特別展、無料の展示を企画展と呼んでいます。ちなみに、これまでに当館が開催したのは特別展が38本、企画展が27本、その他の展示が25本です。

当館ウェブサイトの「過去の展示情報について(過去開催された展示)」から

タイトルをご覧くださいと当館の学芸員がどのような活動をしているのかを推測していただけたと思います。コレクションや研究成果の紹介のほかに自然保護などの社会的な活動をテーマにした展示も見られます。いずれにせよ、あるテーマについて、学会発表や論文の出版ではなく(それらは別に行うとして)、展示という手法で伝えようとしてきました。

展示の評価

展示全体の意図は伝わったのか、個々の展示コーナーの内容は理解されたのかということは、展示を制作した側には重要なことですが、結果を知ることは容易なことではありません。来館者全員にインタビューやアンケートを行うのは事実上不可能ですが、サンプリング調査を行うことはあります。それでも、「わかりやすい」という回答が本当に内容を理解した上で、なのかどうかは分かりません。あるいは楽しかったとか美しかったとか(その逆とか)という評価項目も大切だと思います。いずれにしても、展示の効果をどのように測定し評価に繋げるのか、評価項目や指標をどのように設定する

のかについては、今のところ決まっていないようです(参考; 全科協ニュース50(5))。

さらに、展示の評価というと、入館者数や入館料収入などの数字に注目が行きがちです。特にブロックバスター展と呼ばれる新聞社やテレビ局などが開催する大規模展示では、入館料が2,000円を超えることが多いですし、利益に直結するので重要な項目でしょう。それと比べると当館では特別展で200円(中学生以下は無料)ですし、企画展は無料なので、収入という意味において、入館者数は(多いに越したことはないですが)重要ではありません。逆に、あまり人気がなさそうなテーマでも、当館が重要だと考えたテーマであれば実施することができます。

展示に使われるIT技術

当館の展示は30年前のままなので、IT技術という意味で、現在の視点から特筆すべきものはありません。ですが、さまざまな企業の協力を得て、実験的な展示や展示解説を行ってきました(現在は一つも残っていません)。

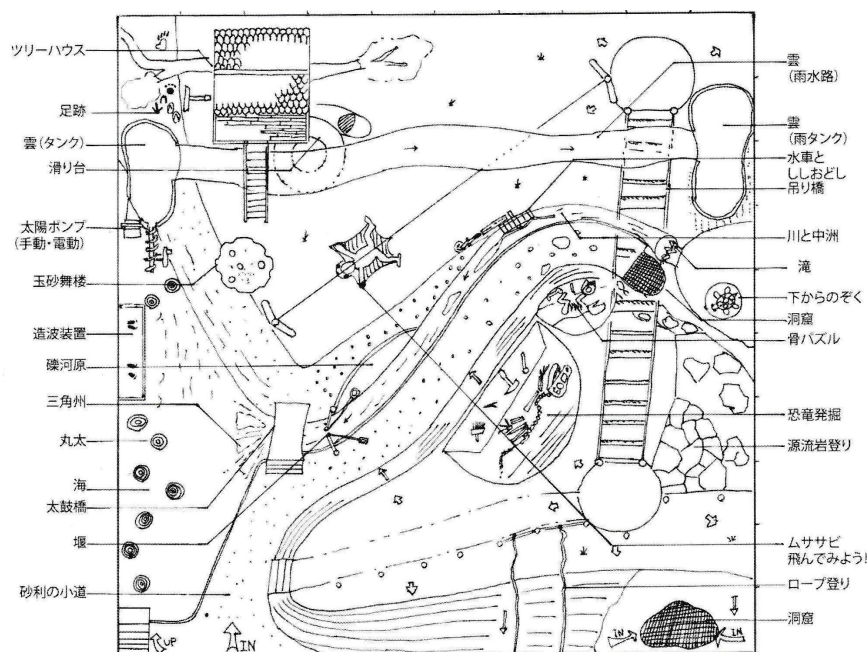


図1. 「子どものための展示と展示プラン」に掲載した展示プラン(大島画)。

【2013年3月BYOD 音声ガイド】

1階展示室のラベル・パネルを交換したのと同時に、BYOD(Bring Your Own Device)を利用した音声ガイドシステムを導入し供用しました(2013年3月)。当時の音声ガイドは専用機器を有料で貸出すのが一般的だったので、フィーチャーフォン(ガラケー)、スマートフォン、タブレットに対応した無料サービスはほとんど例のないものでした(2024年3月終了)。

【2014年3月ARプログラム「V×Rダイナソー」】

博士と学ぼう！恐竜のヒミツ「V×Rダイナソー」と題して、名古屋大学博物館の藤原慎一博士に恐竜について、凸版印刷株式会社(当時)の坂田雅章氏にはAR(Augmented Reality)技術について解説していただきました(SEISAミュージアムシアター)。同日、タブレットを使ったARを来館者に体験してもらう実証実験を生命展示室で行いました(2014年3月15日～16日)。当時はVR(Virtual Reality)が普及しつつあるような段階だったので、ARを初めて体験する人が圧倒的に多く、ARという言葉を使うために説明が必要でした。

【2018年10月被写体認識基盤システムを利用した展示解説】

1階生命展示室において、NECネクサソリューションズ株式会社(村上弘晃氏・草葉 努氏)のご協力を得て同社の被写体認識基盤システムを利用した展示解説の実証実験を行いました(2018年10月20日～11月25日の土日祝日の13日間)。これはあらかじめ登録した展示の画像とタブレット(のちにスマートフォンにも対応)で撮影した画像とを照合して、候補となる展示物を表示し、大人向けと子ども向けの解説やクイズを提供するサービスでした。2次元コードやARサインなどを全く使用せず、展示そのものがキーになる画期的なシステムでした(科研費 課題番号 16K01206を使用した/展示学 58: 26-27/2023年4月終了)。

子どものための展示

2008～2011年度の4年間にわたり「子どものための展示開発—自然史博物館にふさわしい展示と展示プラン—」という研究(科研費 課題番号 20605018)を

当館のメンバーと一緒に行いました。当時年間約24万人の入館者のうち32.4%を子ども(園児7.4%、小学生25.0%)が占めていたにも関わらず、当館には子どものための展示(室)がないことに疑問を持ったことがきっかけでした(自分の子どもが小学生になったこともあります)。

結局のところ、科研費の報告書から13年を経過しても当館に展示更新予算が付くことはなく、この時考えた「子どものための展示プラン(図1)」はお蔵入りとなりました。しかし、一部は特別展などで実施できましたし、展示制作時に目標や目的を明確にして、他館の展示を見て参考にし、ディスカッションや模型制作、部分的なプロトタイプを作って試行するというプロセスをメンバーが経験できたことは、次へ繋がっていくものと思っています。

常設展示の更新

当館では2021～2022年度にかけて、展示更新ワーキンググループを立ち上げ、展示更新計画を策定しました。それが「生命の星・地球博物館30年目の展示更新プロジェクト」で、今年の特別展「生命の星・地球博物館の30年」(2024年7月13日～11月4日)で一部を初公開しました。そのさらに一部を短く紹介します。

1階では、

- 国内産のハドロサウルス類(恐竜)を追加し、恐竜展示を充実させるとともに、繁殖に関する展示を追加(図2)。
- 収蔵庫にある北米産漸新世の化石を展示し3,000万年前の哺乳類の多様性を示し、その上方でクジラ展示の向こう側の壁面を活かし、大スクリーンで「クジラと海」「陸上哺乳類の生活」などの映像コンテンツを投影(図3)。

3階では、

- 地球のダイナミクスを紹介する没入型シアターを導入部に展開して、地球の成り立ちから日本列島の形成、フォッサマグナの形成、富士山の形成を紹介(図4)。

この展示更新を行うための事業費(標本の購入を除く)は、展示会社による試算でざっくり23億円!だそうです。プロジェクトが目の目を見る“とき”が訪れますように…祈。

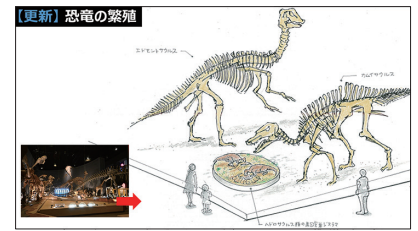


図2. ハドロサウルス類の展示を充実させるとともに、卵と巣の化石からわかった繁殖行動を紹介。

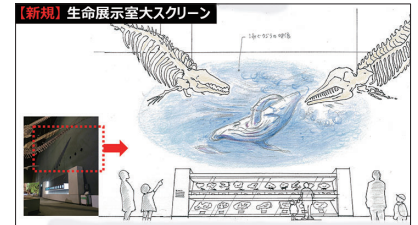


図3. 漸新世の哺乳類化石展示と共にその上部の壁面にクジラ類が泳ぐ姿を投影。

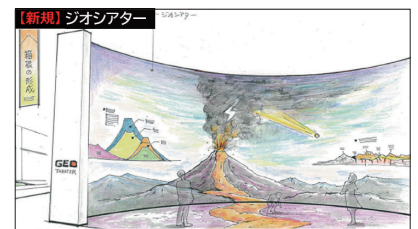


図4. 箱根・富士の火山活動など、ダイナミックな地球の姿を没入型シアターで体感!

コラム「赤字」

ときどき、「博物館は赤字を垂れ流しているから、せめて入館料をたくさん取って稼げ」というような意見を見かけます。

博物館法第23条には「公立博物館は、入館料その他博物館資料の利用に対する対価を徴収してはならない。但し、博物館の維持運営のためにやむを得ない事情のある場合は、必要な対価を徴収することができる。」とあります。これは図書館法第17条の「公立図書館は、入館料その他図書館資料の利用に対するいかなる対価をも徴収してはならない。」に比べると対価を徴収するハードルが下げられています。とはいえ、どちらの場合も基本的には「対価を徴収してはならない。」とされているため「赤字」という概念は適用できないことがわかります。

公立の図書館や小・中学校は「赤字を垂れ流している」などといわれなくてうらやましいなあと思います。